

## 佳作

### 「宿命を使命に変えて」

渡辺 恵子さん

「とっちゃん、さあ、行こか。」

一月の肌寒い朝、今年も実家の玄関先で母の親友、節子さんの元気な声が響いた。その日は母の健診の予約日だった。車の中では、友人の芳子さんと和枝さんが母に手を振っている。この健診仲間四人組は小学校時代の同級生で、全員八十二歳。発起人は節子さんだ。

「まさか節子さんがこんなに変わるなんて」

シルバーマークの軽自動車を笑顔で見送りながら、ふとあの出来事が私の頭をよぎった。

あれは十年前の、お盆を過ぎた頃だった。彼女と同居していた一人息子の洋介君が、出勤前に突然居間で倒れ、すぐ病院に救急搬送したのだが、その二時間後に帰らぬ人となった。脳幹出血・・・四十三年間の、あまりにも短い人生だった。洋介君は会社の方で毎年健診の申込みをされていて、今までに欠かしたことは一度もなかったという。今回倒れたのも健診の一ヶ月後で、その時の健診結果も、特に異常のあるところは見つからなかった。

「人間の寿命ってな、自分ではどうすることもできへんのや。そやから健診に行ったって何の意味もないと思うわ。命なんて、その人の宿命で最初から決まってるんやから。」

彼女は洋介君が亡くなった当初、悟りを開いたように周りの人にそう語っていた。

そしてそれからしばらく経って、彼女が母のところにやってきた。

「とっちゃん、これから毎年、私と一緒に健診に行こ。健診が終わった日に、来年の健診日を決めるんや。その日は肉親の葬式以外は、何があってもそれを絶対優先させなあかん。」 あまりの彼女の変化に、母も私も呆気にとられた。そして彼女は遠い目をして、半年前のエピソードを語り始めた。

その日も彼女はお通じが終わった後、トイレの中を覗いてみると、便に血が混じっているような気がした。彼女は以前に痔を患った経験があり、今回もそれが原因だと思い込み、近所の町医者で座薬を出してもらい、しばらく様子を見ることにした。そしてその日の夜中、彼女は不思議な夢を見た。居間の片隅で洋介君が膝を抱えて座り込み、悲しそうな目で彼女をずっと見ている。彼女が彼に駆け寄ると、彼はキッと彼女を睨み付けた。「何？何が言いたいん？」何度彼女が尋ねても、彼は終始無言のまま、一夜の夢が覚めた。

明るく日は、キャンセルするつもりだった彼女の定期健診の日だった。彼女は不思議な力に背中を押されるように、しぶしぶ健診に出向いた。その時、彼女が持参した便から潜血反応が出て、その後の精密検査で大腸癌が見つかった。幸運にも早期発見で、病巣は粘膜内に留まっていて転移は見当たらず、内視鏡で摘出することができたのだ。

「発見が遅れてたら大変な手術になり、たぶん、人工肛門になってしまったでしょうね。」この主治医の言葉に、彼女は絶句した。

その後、彼女は洋介君のお墓参りに飛んで行った。手を合わせていると、彼の弾んだ声が聞こえてきたという。

「母さん、僕の病気は健診で見つからへんかったけど、僕がすべてやと思わんといてな。健診で早期発見できて、助かる命もいっぱいあるんや。よかったな、母さん」って。

そして彼女は目を潤ませながら母に言った。

「定期的に健診を受けていたのに発見出来ず、助からなかった息子も、あの子の宿命。そして夢に出てきた息子に健診を促されて命拾いした私も、これが自分の宿命。私、今回命を助けられた恩返しに、自分の友だちを強引に健診に連れて行こうかなって。そして私と洋介の宿命を、これからの自分の使命に変えていこうかなって。それがあの子への一番の供養になると思うんや。」

あれから今年で八年目を迎えた。三年前に母は高血圧と心臓に異常が見つかり、今も治療継続中だ。そして和枝さんは五年前に子宮癌の手術を受けたが、ごく初期段階で発見されたので、予後はすこぶる順調だ。これもみんな節子さんが強引に健診に誘ってくれたからこそ、今もみんなが笑っているのだ。

定期健診で病気が必ず早期発見され、助かるという保障はない。でも早期発見できて完治する確率の方がはるかに高いのだ。

最近、これも節子さんの案で、四人組はウォーキングを始めた。

「今まで八十年以上も生きてきたから、いつ死んでも悔いないんやけど、来年の一月までは死なれへんわ。だって四人で健診の予約入れてるから、病院や他の三人に迷惑かけられへん。だからそれまで元気でおらなあかん。」

と、お互いを励まし合っているようだ。

定期健診は高齢者たちに、思わぬ副産物を与えているかも知れない。